

暗 雲

福富雅樹【著】

毎年、夏になると一人の男のことを思い出す。その男の名はK・Dといった。彼は殺し屋だった。

私は昔、その男の相棒をしていた。相棒と言っても、仕事の請負が専門で、人に手をかける仕事は彼の専門であった。その当時の彼は、一匹狼の殺し屋で、仕事の話の時を除いてほとんど会うことはなかった。しかも、連絡は彼からの一方通行で、私からは全く連絡がとれなかった。しかし、私はそのことに不満を抱くことはなかった。というのも彼は定期的に連絡はよこしてきたし、報酬について文句一つ言わず、仕事も確実にやり遂げたからである。

彼とコンビを解消して、かれこれ十年になる。

数年前までは、ホテルを経営していたのだが、ある事件をきっかけに……：：：そう、あれは七月のことであった。それは血も凍るような恐ろしい体験。事故の記憶に永遠に残る事件である。

1 再会

事件の日の二日前から、私は家族と共に新しく建設中のホテルの視察もかねて、九州南東の黒飛島に避暑にきていた。この島の土地を買うことは、私にとって一つの賭だった。それというのも、この島には観光施設と言うものがまるでなく、実にひっそりとした寒村で、とても人が集まるとは思えなかつたからである。しかし、万に一つの望みがないわけでもなかつた。この島は自然に満ちあふれていて、空気もうまく、海の水もエメラルドのように深く澄んでいた。

へこの自然を多くの人に味わってもらいたい

そう心に決めた私は、七年前の五月に一年かけて、ホテルを建設した。開業当時、ホテルを大々的に広告したにも関わらず、反響は今一つであつた。それでも交通に力を入れてからは、徐々に客が集まるようになり、今ではこの島の営業権は自社の独占であつた。

その日は朝の八時頃から海岸に海水浴に出た。しばらくは妻や子どもたちと泳いだり水遊びをして楽しんでいたが、私の方は年のせいか疲れてしまい、一足先に砂浜に戻つて、ヒニールシートの上に寝そべて、かんかん照りの太陽

の下で、甲羅干しをしていた。

そんな折、私を呼ぶ声がどこから聞こえてきた。——おや、誰だろう。どこかで聞いたような声だ。

ふとみると、私の目の前に二本の足がある。その足のほうから、ゆっくりと視線をあげると、懐かしい男の姿があった。

「君は……」

私は感激のあまり声が詰まった。

「こんなところで、君を見かけるとはね」

その男は親愛の情を示しながら、私の隣に座った。

「ひさしぶりだなあ」

「君も元氣そうだな」

「お陰様でね」

それにしても何という偶然の巡りあわせだろう。親友とは言え、裏の世界の人間に再び会おうとは。

彼は顔立ちも体格も十年前と変わっていないなかった。

「正田君、ホテルの社長だそうじゃないか。おめでとう」

「それほどでもないよ」

と照れくさくそう言った後、私は少しばかり深刻な顔つきになって「それよりもまだ殺し屋をやっているのかね」と訊いた。

「ああ。俺にはその仕事しかないからな」

「そうか。じゃあ、ここへ来たのもただの観光旅行ではなさそうだな」

これが私の心配していたことだった。なぜなら、ホテルで殺人と言うことになつたら、ホテルの信用を一遍に失つてしまうからだ。

「残念ながらそういうことになるね。でも、君のホテルに迷惑をかけるつもりはないよ」

「今度の標的は誰だい」

「知りたいのかい」

「もちろんだよ。僕のホテルの客なのか」

彼は軽くうなずいて、

「東京のある大富豪様からの依頼でね、松島英次という男なんだが」

「その名前、聞いたことがあるな」

「ほう、その名前を知っているとは、君もずいぶん雲の上の人になったんだね。」

それなら話すでしょう。松島英次と言うのは有名な総合電算機器会社、ニュー・トラルの社長松島健三の甥なんだ。依頼人の名は言えないけど、健三の遺産の分け前を減らすため殺してくれ、というのだ」

松島健三と言えば、半年前に癌で入院し、現在では危篤状態だと聞いている。

「そいつは妙な話だね」

「妙？」

「だって、高々甥に入る遺産なんて大した物ではないだろう、君に払う報酬を考えたらね」

「うん。でも、そうでもないんだ」

と彼は思わせぶりに言った。

「どういうことだい」

「英次は健三の弟、隆行の一人の息子なんだ」

「なるほど、甥の英次が死ねば、隆行の遺産は健三のものとなり、その健三が死ねば、その親類たちのものになるというわけだ」

「そうだね。おやっ、君の娘さんが来たようだぜ」

見ると、水着姿の長女の玲子が、歩いてくる。玲子が私が言うのもなんだが、

容姿端麗にして才色兼備な私の自慢の娘である。

「あらつ、お客様？」

玲子は隣の南原の顔を見ながら言った。

「こんにちは。加納と言います」

と彼は私に目配せして、言った。私もそれに合わせて、

「彼は学生時代からの親友なんだ」

と言った。

「ふうん。私は玲子といいます。どうぞよろしく。——それより、お父さん」

「なんだ」

「ビーチボール知らない？」

玲子はバッグを探しながら言った。

「さあ、知らないぞ。お母さんや恵理と一緒にいるのか」

「うん。もう、海から出て、砂浜で遊んでるわよ」

「そうか。あんまり遠くまで行くなよ」

「わかってるって。じゃあ、加納さん、失礼します」

そう言つて、玲子は海辺に向かつて走つていった。

「いい娘さんだね。高校生？」

と彼は玲子の後ろ姿を目で追いながら言った。

「君の娘も生きていたら、あのくらいかな」

「そうだな」

「あ、昔のことを言つてすまん」

「かまわんよ。さて、宿へ帰ろう」

と彼が腰をあげた時、海辺の方がざわざわとし始めた。

「何だろう」

私と彼は顔を見合わせると、すぐに騒ぎの現場に駆けつけた。人混みをかき分けて、前に出た。

「あなた」

妻の由美子私を見つけて、寄つてきた。

「どうしたんだ」

「正田君、あれを見たまえ」

Dの指さした空を見た時、私は自分の目を疑った。

遠くの水平線の空がごわごわと紫色の雲ぐもに覆われ、照り輝く太陽を次第

に消していく。そして、五分後には水平線から巨大な影がその頭角を現した。それは人々をあざ笑う悪魔の顔に見えた。私はこの光景から目を話すことができなかつた。

「化物だ！！！！」

「嵐が来るぞ！」

「天変地異の前兆よ」

辺りが前にも増して、騒がしくなつた。人々は不吉な前兆を感じえたのであろう。女、子供はキヤーキヤー喚きたて、大人たちは子供を連れて、次々と砂浜へ避難する。こういう時こそ、落ち着かねばならないのに。

「津波が来るぞ」

「悪魔が襲つて来る」

このような異常な暴言が飛び交い、周囲の混乱を招く。人々は一斉に砂浜を出ようと辺り構わず逃げていく。こうなると、じつとしていようにも、止まれば人混みに巻き込まれ、ますます危なくなる。まさに最悪の事態だ。すでに家族の姿も見失つてしまった。

「正田君！」

背後からDの声がした。

「いつたいたいどうしたらいい」

彼は手にしたサツクの中から、大型のリボルバーを取り出すと、頭上に向けて空砲を放った。大きな銃声は、逃げ惑う人々の足を止めた。

「落ち着け！」

彼は叫んだ。「今から一步でも動いた奴は俺が殺す」

この言葉には驚くべき効果があつた。

「みなさん、あれは単なる雲です。惑わされてはいけません」

私は極力、穏やかな口調で言つた。そして、ようやく人々を落ちつかせ、誘導して砂浜から送り出すことができた。

「お父さん！」

玲子が母と妹の四才になる恵理と共に心配そうに私のもとにやつてくる。

「無事だったか」

「うん。それにしても、加納さん、かつこよかつたね。あれっ、加納さんは？」

「ん、さつきまでいたんだが……」

私は周囲を見回したが、もうDはいなかつた。

その夜はホテルの部屋で、床についても、昼間見た雲が目には焼きついて、寝付けなかった。眠れないのに目をつぶっていると、あれこれ考えが浮かぶ。

Dは何処へ行ったのだろうか。そういえば、彼は何処に泊まったのだろうか。確か、Dはこのホテルに泊まる松島英二を殺すと言っていたっけ。後でフロントで調べておくか。

「ねえ、あなた、眠れました？」

布団の中で私の隣に寝ている由美子が、私の耳元で囁いた。どうやら私と同じ気持ちらしい。

「いいや、昼間、あんな光景を見せられてはね」

「そうね、あれは何だったんでしょう」

「わからん。私は未だに夢ではないかと思っっているんだがね」

「とにかく、今日のことは忘れましょう」

「ああ」

私は妻の言うとおりに寝ることに専念した。もともと、本当に眠りに就いたのは午前三時を廻った頃だった。

翌朝、私は電話の音で目を覚ました。由美子が始めに電話に出たが、

「あなた、フロントの佐田さんからよ」

と私に受話器を手渡した。

「ああ、正田だが、……なに！？……わかった、すぐ行く」

私は電話に受話器を戻すと、深い溜め息をついた。

「どうなさって？」

「ホテルの六階の一室で男が殺されたそうだ」

由美子の顔が青くなつた。私はすぐに私服に着替えて、部屋を飛び出した。

果たして殺された男は松島英二なのだろうか。Dは決して私には迷惑はかけないといったが、あれは嘘だったのか。いずれにせよ、着いてみればわかることだ。

廊下を歩く間、私の心には、ますます不安が広がっていた。

2 殺人

「社長、こ、こちらでございます」

私がエレベーターで六階に着くと、佐田が落ち着かない様子で、出迎えた。

彼は私を見るなり、口をぱくつかせてようやく話し出したのである。

私は佐田に案内され、六〇三号室の部屋の前まで来ると、

「他の者には気付かれたかね」

「いいえ、いち早く社長にお知らせしようと思ひまして」

「賢明な処置だ。では、フロントのマネージャーにも知らせてはいいのだね」

「はい」

「よし、君は私がいいというまで、黙っていてくれたまえ。決して事件を揉み消す真似はしないつもりだ」

「承知しました」

「それでは中へ入るとしよう」

私とボーイの佐田は、連れ立って部屋の中に入っていった。中は和室で六畳ほどの広さである。玄関のすぐ両脇にバスルームとトイレのドアがあり、そして、目の前の開き戸を開けると、問題の部屋が見えるわけである。

「死体は部屋にあるのかい」

「え、ええ。戸を開けてもらえば、わかります」

私は全身血だらけの死体が無残に放置されている光景を想像しながら、戸に

ぐつと力を入れた。すうつと戸が横に開く。一瞬、私は目をつむった。

「そんな馬鹿な、死体がない」

と呟いたのは佐田であった。私が目を開くと、そこには死体も何も無かった。ただ、中央に木製のテーブルが置いてあり、右隅にはテレビ、その横に冷蔵庫、また左手には備付けのロッカーダンスと、ごくごく平凡な居間である。

「おい、場所を間違えたんじゃないのか」

「そんなはずはありません。確かにここに……」

佐田は啞然として、部屋を見渡していた。どうやら、彼の言うこともまんざら嘘ではないようだ。しかし、血だらけの死体が、部屋の中から跡一つ残さずどうやって消えたと言うのか。実に不可解だ。

「よく部屋を探してみよう。もしも、ということもある」

私たちは、早速、箆笥や冷蔵庫を開けてみたり、トイレやバスルームに入ってみたりもした。だが、何一つ証拠はえられなかった。

佐田は大分動揺していた。自分が見たはずの死体がどろんと雲隠れするように消えてしまったのだから、無理もない。

「佐田君、まず順序立てて聞きたいことがある。いいかね？」

「ええ、何でも聞いてください」

「この部屋に宿泊していた者の名は？」

「確か葉山優二という人物です」

松島英二ではないのか。いや、偽名という事もあり得る。

「君はどうしてこの部屋に来たのかね？」

「男の声でフロントに電話があったのでございます。シャワーの具合が悪いので、直しに来てくれとのことでした。そこで、私が行ってみますと、血だらけの死体があった次第でして……」

「ふむ。ともあれ、この事は君と僕の胸に収めておこうではないか」

「はい、社長にお任せします」

佐田はそういつて、部屋を出ていった。部屋に一人残った私は、もう一度くまなく捜査した。

結局、私が部屋に戻ったのは、2時間後の午前8時であった。多分、食事も行つたのだろう、部屋には誰もいなかった。既に布団は畳まれ、押入れに収納されている。私は近くの座布団を一枚取つて、それを二つに折つて、枕にして、その場に横になつた。昨夜から余り眠つていないせいか、眠気が急に来

る。

その時、入口のドアが開いた。

「あら、あなた、帰ってらしたの？」

由美子と娘たちが部屋に入ってきた。

「どこへ出かけてたんだ？」

「食事よ。あなた、いつまでも戻ってこないから」

「そうか」

「あなた、ちよつとお聞きしてよろしいですか」

由美子がお茶を差し出しながら、言った。

「構わんよ」

「昨日、海であなたと一緒に人々を誘導して下さった方は、どなたですか」

「加納さんでしょ」

横から玲子が口を挟む。

「加納さん？知らないわね」

「高校時代の友人だからね」

「そう、じゃあ、お礼をしなきゃいけないわね」

「いいよ、そんなことしないで」

私は妻の言葉を遮った。私とDとの関係に深入りされてはまずい。

「でも、それでは失礼じゃないかしら」

と由美子が言うのと、

「そうだわ今夜のディナーに招待しましょうよ」

と玲子まで乗り気になっている。人の気も知らないで……

「ねえ、そうしましょう」

由美子が私を見た。

「仕方ないな」

皆が乗り気では断る理由もないので、承諾するしかなかった。まあ、夕食までには時間がある。それまでに何とすればいいだろう。

私はテーブルの新聞を取り上げて、広げた。昨日の怪奇雲の記事が小さく載っている。これで写真を撮った者がいれば、たちまちスクープだ。さてよ、あの海岸にはあれだけの人だからだ。誰か一人ぐらいはカメラを持っていて、写真を撮ったに違いない。その写真があれば、あの雲の正体がわかるかもしれない。こうしちやおれないぞ。

私は早速、フロントに電話をかけてみた。応対に出たのは佐田であった。

「どんな御用でしょうか」

「すぐ、ホテルの宿泊客に聞いてほしいことがあるんだ」

「どのようなことをでしょうか？」

「昨日の怪奇雲の写真を撮った者がいるかどうか、調べてほしい」

「はい、承知しました」

「それと、そのことを新聞社へも問い合わせさせておいてくれ」

「はい、では、いつまでに調べておけばよろしいでしょうか」

「できるだけ早く調べてくれ」

「承知しました、分かり次第お知らせします」

「頼んだぞ」

電話を切ると、まずは安堵の息をついた。しかし、まだ消えた死体の件も残っていることだし、Dの行方も気になる。まだまだ安心は出来ないな。私にとつてはとんだ休暇になってしまった。

「ねえ、パパ。海に行こうよ」

恵理が私の肩につかまって、甘えてくる。

「パパはね、忙しいから、後で行くよ。先にママ達と行っておいで」

「なんだ、つまんない」

恵理はプウツとふくれつ面になったが、由美子が海に行く時になると、もう機嫌は治っている。

私は、海に行く由美子たちとはロビーで別れ、ホテルに残った。

「さて、Dを捜しにいくかな」

「その心配には及ばないよ、正田君」

「ん？」

私は後ろを振り向いた。目の前には、サングラスを掛けたDの姿があった。

「何処に行ったのかと思ってたよ」

「君には言わなかったかい、僕の宿泊場所を」

とDは澄ました顔で言った。

「それより、僕は君を捜していたんだ」

「それはさっき聞いたよ。僕だって、君に用があるから来たんだぜ。おっと、それはそうと、立ち話も何だから、喫茶店でゆっくりアイスコーヒーでも飲みながら、話すでしょう」

私もDの意見に賛同して、ホテル内の喫茶店に入ることにした。店内は、わざわざ一流デザイナーに依頼して装飾させただけあって、モダンな造りである。昼間は宿泊客も海に遊びに出ているせい、客もさほどいない。私たちは左手の窓際の席に座った。

私はウエイトレスに紅茶を、Dはアイスコーヒーを頼んだ。彼は自分の注文した飲物が来るまで、ずっと黙り込んで、窓の景色を見ていた。そういうえば、私から先に彼に話し掛けたことはなかった、と今更ながらに思う。

五分ほどして、注文のものが来た。

「実に厄介なことになったよ」

とDはようやく口を開いた。しかし、厄介なことという割には平気な顔をしている。もつとも人を殺しても、表情一つ変えない彼ならではの性格だろう。

「標的を逃がしたのかい」

私はホテルで殺された男のことを、念頭に置いた。

「いや、その仕事は昨日、終えたからいいんだ」

「本当かい？」

私は消えた死体の件を話そうとしたが、Dがそれを遮った。

「これは、他の人々を危険に巻き込むかもしれない」

と私を厳しい目で見て、「奴が、僕を口封じのために殺しにきたんだ」

「奴って？」

私は紅茶を啜りながら言った。

「緊急時だから、君にも話そう。そいつの名は松島一彦、健三の長男だ」

「君の話では、一彦は、松島英次殺害の依頼人だね」

「そうだ、奴は英次殺害の秘密を知っている僕を、最初から殺す気だったんだ」

「しかし、君にかなう殺し屋なんているのかい？」

「僕の情報ではかなり腕利きの殺し屋を雇ったらしい。ただ、この仕事の件は君にも話してしまったのだから、君も身边には十分に注意したまえ。家族も同様だぞ」

「わかった」

私は急に心配になった。果たして今の私に家族が守れるだろうか。

「ところで、君の用と言うのは？」

さつきまで深刻な話をしてきたDが急に話をかえた。いったい何を考えているんだ。

「ああ、家内が、昨日のお礼に君をディナーに招待したい、というのだ」

「それはいいねえ、ぜひ、行かせてもらおうとするよ」

「それと、昨日の怪奇雲のことだけど」

「あれなら、僕も調べてるよ」

「何か、わかったかい？」

「今ははっきり言えない。ただ、三、四日中には、はっきりすると思うよ」

「じゃあ、もうある程度はわかっているのかい？」

「私は少し興奮気味に尋ねた。」

「昔、見たことがあるんだ、あの現象をね」

「だったら、早急に調べてくれないか、金に糸目は付けない」

「しかし、殺し屋が君たちを狙っているんだぞ」

「それは私が何とかする」

「私は語気を強くしていった。」

「君を信じよう。明後日までには必ず戻る」

「待つてるよ」

「私とDは固い握手をした。」

その時の私には数日後に迫る恐怖の出来事に気付く余地もなかった。

3 正体

Dは飛行機で島を旅立つ前に、三つのことを、私に尋ねた。まず第一に「この島に警察はあるか」と言う質問で、私は「無論、あることはある。しかし、私がこの土地を買う前には、村には駐在所ぐらいしかなかった」と答えた。

次の質問は前と同じ様なもので、「この島には新聞社はあるか」ということだった。それにはさつきと同じように「新聞社はあるが、私が土地を買ってから後のことだ」と答えた。

最後の質問は次のようなものだった。

「七年前、君が黒飛島を買うにあたって、村の住人は快く譲ってくれたか」
随分と偏屈な質問だとも思ったが、私の答えは、

「そうだね、もっと反対があると思ったんだけど、案外、たやすく手に入ったよ」

というものである。

Dは私の答えを聞くと、大きくうなづきながら、何かをつかんだ様子だった。そして、彼は私に「七年前に引越した村人たちの住所をわかるだけ教えてほしい」と頼んだので、ホテルの書類を引き出して、ようやく二人の人物の所在を突き止めた。

Dは私から書類を受け取ると、満足そうな顔で旅立っていった。

「とりあえず妻子を安全な場所へ隠さねばなるまい」

私はDを空港まで送り出した帰途のタクシーの中で考えていた。今から家に帰してしまつてはかえつて危険だ。かといって、私に殺し屋から家族を守る力がどれだけあると言うんだ。まして、本当に狙われているのは松島英次殺害の事実を知るDと私なのだ。

思い悩むうちに、タクシーは街路を走り抜け、ホテルに着いた。

ところで、ここで時間の経過について話しておかねばなるまい。今は午後二時四〇分。しかし、注意してもらいたいのは、今日は十三日という事なのだ。つまり、Dと喫茶店で話をしたのが昨日のことなのである。その訳は、七年前に引越した村人の所在を調べるのに時間が掛かったのと、異常な強風のため飛行機の出発が大幅に遅れたことに問題があつた。

ホテルのロビーでは、ボーイの佐田が待っていた。

「社長、私が到らないばかりに、申し訳ありませんでした」

「気にすることはない」

私は穏やかに言った。昨日のこととは、現場に怪奇雲の写真を撮った者がいたら捜してほしいと頼んだことである。そのことは前にも述べたので、説明はしない。なお、結果の方は彼の言葉通り、全く収穫はえられなかった。

佐田と別れた後、私は赤絨毯の廊下を伝って、自室に戻った。部屋には玲子しかいなかった。

「お父さん、お帰り」

座椅子に座っていた玲子が雑誌から顔を上げて、言った。

「お母さんは？」

「恵理とお土産買いにいくつて言つてたよ」

「何時語ごろ」

「一時頃かな」

「ちよつと遅いな。もう三時だろ」

殺し屋が襲われたのでは、という不安が私の脳裏を過つた。

「落ち着かないわね、どうしたの？」

いつまでも立っている私に玲子が言った。

「何でもない」

私は座椅子に座り、腕を組んで、目を瞑った。落ち着かねば、落ち着かねば。突然、電話が鳴った。私はすぐに手を伸ばして電話を取った。

「正田だが――」

「正田さん、奥さんと子供は預かったぜ。返してほしくば、あんたとDの身柄と見代金三千万用意するんだ。場所はS海岸、明日の午前四時だ」

電話は切れた。私は顔からすうっと血の気が引いた。とうとう、妻子が犠牲になった。

玲子も事態を察したのか、私の顔をじっと見ている。

「お父さん、どうかしたの？」

私は娘の言葉に答えることなく、急いで部屋を飛び出し、フロントへ駆けつけた。ホテルに電話を取り次ぐ場合、必ずフロントに電話を通すはずだ。

「今、私に掛かってきた電話、誰からだ？」

「はい、竹田と申しておりました」

多分、偽名だろう。それにしても後13時間しかない。三千万用意することが出来ても、Dをすぐ見つけるのは非常に困難だ。

畜生、どうしたらいい。警察に知らせるか。駄目だ、そんなことしてみろ、正体がばれちまう。それに受渡し時刻が四時と言うのも気になる。大方、早朝の人気のない海岸を選んで、皆殺しにする気だ。こうなったら、運を天に任せられない。

私はマネージャーの田村に相談した。有能な部下で、もつとも信頼の置ける男である。

「わかりました。社長の頼みとあらば、すぐ用意致しましょう」

三時間後、田村は三千万を集めてくれた。一方、Dの行方は部下に捜させているが、依然として不明である。

私はまた犯人から電話が掛かってくるかもしれない、とフロントの電話の前にいた。娘には直接知らせないが、薄々気付いているようだ。

空はナイトブルーに染まり、硝子のごとく砕け散った星々がらんと輝いている。遠くでは、波打ち音が、風に運ばれて聞こえてくる。

しかし、私にはそんなことに気にかける余裕は殆どなかった。かえってカチ

カチと鳴る、壁掛け時計の秒針の音の方が気になつてしまふ。

こうしてゐる間にも、哀れな妻子は冷酷な犯人に痛めつけられているのだから。もしやもう殺されているのでは。

莫大な富を得て、いとおいしい妻や子供たちに囲まれて幸福な人生を送つてきた私に、このような天罰が待ち受けていようとは。やはり、裏に生きた人間には表の幸せをつかむことができないのか。

「お父さん、あ母さんや恵理に何かあつたのね」

玲子がカッブに入ったコーヒを二つ、両手で持つてきて、片方を私に差し出した。時計は午後十一時を回っていた。

「心配しなくていい。早く寝なさい」

私はうわずつた声で言った。

「お母さんたちが帰つてこないのに寝られるわけないでしょ」

玲子は強い口調で言った。

「わかつた、話すよ」

私は事情を打ち明け、玲子を部屋に返した。もっと慌てるかと思つたが、案外、玲子の気持ちはしつかりしていた。

外で車のエンジンの音がした。しばらくして、ホテルの入口の自動ドアが開いた。

「D君！！」

私は椅子から立ち上がった。喜びの余り、駆け出してしまいそうになった。

「僕を捜していたようだね。喜びの最中、悪いけど、僕は君に恐ろしい報せを伝えなければならぬよ」

彼は外見ではわからないが、かなり深刻な問題を抱えてきたようだ。

「あの雲の正体が分かったのかい」

「ああ、わかったとも。恐ろしいことだよ。僕は君に早くそのことを知らせなくて、明日の飛行機を待たずに高速艇で帰ってきたよ」

Dはいつになく慌てていた。何かがあるというのだ。

「実は僕の方も大変なんだ。妻と娘が誘拐された」

しかし、彼の反応は変わらなかった。私の話をまるで耳に入っていない。

「そんなこと、今は考えなくていい。とにかく、君のすべきことは早く島の人々を避難させることだ」

私は腹が立つ前に、彼の鋭い口調に驚かされた。それほど、彼は真剣なのだ。

「よし、わかった。いつまでに避難させればいい」

「三時間だ」

「三時間だつて？」

私は目を丸くした。

「時間がないんだ。警察の力を借りてもいい。力づくでも人々を外へ出すな」
私は田村や佐田に指示して、手伝いを頼んだ。それからが大変だった。ホテル内にいる客は深夜という事もあり、問題なかったが、街を繰り出した客については捜し出すのに困難を究めた。さらに、市街地の住民に関しては地元の警察署長に頼んで、無条件で警察の協力を得たものの、いくら外出禁止を叫んでみても理由がわからなくては納得できないところもあり、説得は難航した。

結局、私が全責任を執るという形で、強制的に街を閉鎖し、午前三時までには街を歩く者はほとんどいなくなつた。

私がこのような冒険に出れたのも、長きに渡る彼との信頼関係以外にはなにもものもなかった。

「君の力は凄いね。警察まで動かせるとは」

Dはロビーの娯楽室でコーヒーを飲みながら言った。

「君にはいつも苦勞させられるよ。これで何もなかったら、僕は破滅さ」

「いいや、事態はこの数時間中に必ず起こる」

「しかしだ、氣象庁に問い合わせても、特に何事も無いといってるし——」

「氣象レーダーに写るはずないさ。あの奇怪な雲は——」

Dが言いかけた時、

「社長！」

といって田村が血相を変えて、駆け込んできた。

「どうした？」

「何を呑気なことを。奥様はどうなさるんです」

田村が興奮したように言った。

しまった。あまりの急がしさにすっかり忘れていた。私は時計を見た。もう

一時間しかないじゃないか。

「D君、由美子と恵理が誘拐されたんだ」

といって、私はその犯人の要求が、三千万と僕とDであることを告げた。

彼はどうにも困ったという顔つきをして、

「行かなくていいよ。たいしたことじゃない」

と、こともなげにいった。

「何！」

私は田村が止めに入らなければ、彼に踊りかかって、殴り倒すところであった。私は息を弾ませながら、彼を睨んだ。

「今、外に出ては危険だ」

「由美子が殺されてもいいと言うのか」

私の声はやり場のない怒りに上ずっていた。

「行けば、殺される」

彼は私を強い視線で見た。

「それでも僕は行くぞ」

「相変わらずだな、君は」

彼はゆつくりとソファから立ち上がると、微笑みを浮かべ、私の目の前に歩み寄ると……突如、腹部に激しい痛みを感じた。Dが私の鳩尾を殴ったのだ。私は体を折り曲げて、その場に崩れた。それきり、意識が遠のいた。

4 騒乱

……ああ、腹がズキズキする。何か悪いもの、食べたかな。いや、私はホテルに居るのだ。避暑に家族と来ているはず。そこで、あの奇怪な雲を見て、それから、ホテルで死体が消え、妻子が誘拐された。そうだ、私はDに殴られたのだ。

私はハッと目覚めた。ソファにもたれていた。

「お目覚めですか」

田村の心配そうな顔が見える。

「おい、今、何時だ」

「四時二四分でございます」

「もう時間が過ぎてるじゃないか。なぜ知らせなかった」

「それが……あの方が一人で行くから、決して起こすなどおっしゃいまして」

田村が困りきったように言う。

「なんてことだ」

私は頭を抱えた。これで私は愛すべき妻子を失ってしまったのだ。私は何も立ってもいられず、娯楽室を飛び出し、外へ出ようとした。

「お待ち下さい、危険です」

止める田村を振り切り、自動ドアの前に立ったその瞬間、物凄い羽音と獣の鳴き声に脅かされ、尻餅をついた。あの声は……

私は動転して、声のする海岸に向かって走り出した。ホテルから海岸まで十分ぐらいとは言え、ゆうに七百メートルはある。それほど、大きい音なのだ。待つてろ、由美子、恵理。今、助けにいくからな。

誰もいない車道を駆け抜け、S海岸の砂浜に辿り着いた。風がひどく吹きすさみ、波が荒れ狂い、波打ち際にいつもより深く波が打ち寄せる。そして、空は朝方だと言うのに、異様な紫だった。その空気は天変地異の前触れを示していた。

「あれは……」

ついに鳴動する羽音といまわしい鳴き声をあげる魔物が姿を現した。海岸線の左部の断崖の岩棚から飛び出した恐るべき黒い悪魔。それは空を食い尽くすかのように、一瞬にして空を黒で覆った。

私は恐怖に取りつかれ、顔を強張らせながら、立ち尽くしていた。

黒い悪魔はまるで川の流れるがごとく真っ直ぐ私の方へ向かってきた。その

距離は私の理解を越えるほど早く縮まった。

「し、信じられん……」

私は目の当たりの光景に思わず眩いた。

鳥……黒い鳥……か、からすだ……私に襲いかかろうとする悪魔の正体はカラス。それも塊のような大軍勢だった。

一瞬、風が止まった。と同時に雪崩のようなカラスが私を飲み込んだ。

「ぎゃああああ」

私は悲鳴を上げた。

私はもう体を動かすことが出来なかった。

カアカアカ……無限に鳴き続けるその声は、死を誘う交響曲のようであった。

カラスの雨の中に巻き込まれ、爪や嘴の集中攻撃を浴びる中で、私はその場に崩れ、両手で頭を覆った。服はぼろぼろになり、背中には生皮を剥がされるような激痛が走った。私は気が遠くなりそうだった。このまま早く殺してくれたら、どんなにか楽だろう。私は莫大な富を得ながら、家族一人守ることも出来ず、死んでいこうとしている。因果なものだ。

私は串刺しの痛みについて意識を失った。多分、死ぬなと思った。どこかで銃声がする。もう、どうでもいいことだ……

まぶたに仄かな光を受けた時、私は自分が生きていることを知った。暖かい光だった。目を開くと、白色の目映い部屋にいた。硝子の窓からは黄色い光線が差していた。見ると自分はベッドに寝ていた。白い掛け布団が私の胸に掛けられている。体中に包帯が巻かれていたが、痛みはなかった。ほとんど麻痺しているのだろうか。どうやら、ここは病室のようだ。サイドテーブルには水差しと一通の茶封筒があつた。今、気付いたが、かなり鼻を刺す薬剤の臭いがする。

私は手を伸ばして、茶封筒を取った。「正田様へ」とサインペンで丁寧に書かれていた。封はされていなかったもので、中を開いて、折り畳まれた手紙を取り出した。便箋3枚の手紙で走り書きである。

「Dが助けてくれたのか……」

手紙を読み終えて、私はホッと息をついて、天井を見つめた。

全ては終わったのだ。恐ろしい事件ではあつたが、私にはいい教訓になった。

Dとは最後まで憎んだまま別れてしまった。本当は感謝の意を表すべきだったのに。

「結局、今度の旅行は私だけが踊らされたみたいだな」

私は苦笑した。

その時、病室のドアが開いた。

「お父さん、気がついたのね」

玲子が病室に入るなり、私を見て、言った。

「あ、ああ……」

私は玲子の顔を見た途端、涙でいっぱいになった。それは悲しみとも喜びともつかぬ涙だった。

親愛なる正田君へ

君がこの手紙を読む頃は、きっと飛行機の中さ。

せめて、君の容体が回復するまでいたかったが、あいにく忙しいのでね。そ

こは寛大な君のことだから許してくれるだろう。

今回の事件については話すことが多くて、困ってしまおうが、君の回りに起こったことを中心に話していくとしよう。

四日前、君が見た白昼の海岸の怪現象について、疑問に思うことも多いはず。なにせ、被害を直接被ったのだからねえ。

あの現象は君も分かったと思うが、正体はワタリガラスなんだ。君が黒い雲だといったのは、カラスの大群だったんだね。僕が助けなかつたら、今頃は地獄へ真つ逆さまだ。

話を戻そう。僕はあの現象をどこかで見たことかあつた。しかし、君は知らないようだし、そうすると十年以上も前のことになる。そうでなきや、ホテルのオーナーの君が知らないはずないからね。それに前の島の住人が、住み慣れた土地を簡単に引き渡すのも気になる。ともかく、君の依頼も兼ねて、引越した村人にあつてみた。最初は頑固に口をつぐんでいたが、銃で脅かしたら、あつさり吐いたよ。その話によれば、ワタリガラスは十年周期で、南へ行く途中、餌の補給に黒飛島に立ち寄るんだそうだ。今年がその十年目だったんだね。僕がそれを君に話さなかつたのは、君が慌てるといけないからだ。君は昔から

慌て者だからね。でも、実際、君はうまくやってくれた。でも、カラスの通った跡はひどいものだ。森林は裸同然にされるし、畑や田は目茶苦茶。家屋なんかほとんど潰されてるし、窓硝子の破片なんかそこらじゅうに散らばってる。まるで台風の跡だね。君には悪いが、あのホテルの復興はかなり大変だぞ。

さて、もう一つ、君が気になることは、奥さんと恵理ちゃんの行方だね。大丈夫、元気でいるよ。でも、君とは会えないのだ。

驚かず、心を落ち着けて聞いてほしい。実は僕の仕事の依頼人は松島一彦ではなく、由美子さんなのだ。内容はもちろん松島英次殺害だ。その事情は僕から話すので、よく聞いてほしい。

君達は毎年、家族でこの島に避暑に来ていた。全ての間違ひはここから始まる。一年前、島に避暑に来る際、由美子さんが先に二人の娘と出発したのを覚えてるだろう。ちょうど、七月二七日のことだ。

ホテルで子供たちを娯楽室のゲームで遊ばせて、一人で部屋に戻ろうとした時、松島英次が現れたのだ。奴はロビーで見掛けた時から、ずっと目を付けていたのだろう。英次は彼女を巧みに誘って興味を引き、彼女も奴の術中にはまって、一夜を共にしてしまった。そうして、二人は互いに愛するようになった。

君は憤慨するかもしれないが、女というものは気まぐれなものさ。

それからというものは、由美子さんは忙しい君に隠れて、度々英次と密会を重ねた。しかし、君に対する両親の呵責に耐え兼ね、英次に別れようと切り出した。ところが、プライドの高い英次が許すはずがない。夫にばらすぞ、と脅かされ、やむなく交際するしかなかった。そこで、とうとう思い詰めて、僕に依頼したわけだよ。もつとも、僕と君が知り合いだなんて、思いも寄らなかつたろうがね。

だが、英次を殺しても、由美子さんの罪を意識は消えなかつた。しばらく、身を隠したいと言ひ出した。だから、誘拐事件は考えた挙げ句の非常手段さ。ところが、ワタリガラスの群勢の件もあつて、思うようにいかなかった。せつかく、僕が引き止めたのに、君の頑固さには敬服するよ。後で君の気持ちを聞いて、奥さんは涙ぐんでいた。

どうだろうか、由美子さんを許してやってくれないか。今は彼女も反省している。それに彼女が不倫に走つたのだから、君に責任がないという訳じゃないんだ。

もし君にその気があれば、由美子さんに時間を与えてやってほしい。しばらく

く、恵理ちゃんと二人で暮らしたい、と言っている。君が断固として許せないなら、離婚届けも同封しておいた。彼女の判は押してある。君がいつまでも彼女を待つと言うのなら、いづれ彼女も連絡先を教えてくるだろう。

以上で、大体の説明をしたが、物足りないだろうか。

そういうえば、由美子さんが、君が死体の消えた件で悩んでいるといってたのを思い出した。では、それを最後の締め括りに書くとしよう。

松島英次を殺す際は、出来るだけホテルに迷惑を掛けないように気をつけた。ところが、英次は僕が殺す直前にフロントに電話を入れたんだね。英次を殺した後、突然ボーイが部屋に入ってきた時には、さすがに焦った。多分、君に知らせるだろうから、うかうか出来ない。とりあえず、死体を窓から外に投げた。下は森林だからね。次に死体から流れた血をどうすべきか考えた。そんな時、ふとここは和室であることに気付いた。僕は力任せに畳を裏返しにした。畳の表裏の違いに気付くかと、僕はやきもきしたけど、結局、君は気付かなかったね。死体はまだ木の上に乗っていると思うよ。いや、ひよつとするとカラスに食われて、残っていないかもね。

正田君、この四日間は君と巡り会えて、久し振りに楽しませてもらったよ。

これが僕と君の永遠の別れになろう。もう君は僕の姿を見ることはないだろうよ。

では、三千万円は頂いて海外に飛び立ちますので、さようなら。

夏を海外で過ごすK・Dより